

## 南円堂鎮壇をめぐる説話

橋本正俊

興福寺南円堂は、弘仁四年（八一三）に藤原冬嗣によって創建された。その創建の際には、春日明神が老翁の姿となつて現れ、藤原氏の繁栄を寿ぐ歌を詠じたと伝えられている。既に拙稿「興福寺南円堂創建説話の形成」（『仏教文学』25、二〇〇一・三）において論じたように、この南円堂創建の説話は十一世紀末頃に生まれ、初めは諸説が共存していたが、十二世紀中頃には右のような形で定着したと考えられる。南円堂創建の説話は様々な資料に引かれているが、今『七大寺巡礼私記』<sup>三</sup>に拠つて挙げておく（資料の引用に際しては適宜句読点、濁点を施した）。

右南円堂大略如此。抑此堂形火炎伏釜之様又勝諸寺、但中尊観音及天王等像者、長岡右大臣殊発大願所奉造也。其後閑院贈太政大臣、以弘仁四年造斯寺、安置件等像。

古老伝云、房前宰相依弘法大師教訓、為安置不空羼索

像、被建立南円堂之剎、築壇人夫之中、老翁相交詠歌云、

フダラキミミナミノヲカニスミキセバキタノ藤ナ  
ミイカニサカエム

又或人詠云、

フダラヌシミナミノカタニイヘキツイマゾサカ  
エムキタノフヂナミ

口伝云、件老翁者率川明神而春日大明神御使交彼人夫詠此句云々。此歌両様也、実説可尋。

ここでは歌を詠じた人物が、率川明神であるとしているが、やがて春日明神であるとする説に定着する。『建久御巡礼記』には、次のようにある。

此堂ノ被ニ築壇ニ之時、人夫之中ニ春日大明神交ラセ御座シテ、聊有御詠吟、

補陀落ノ南ノ岸ニ堂立テ、北ノ藤波今ゾ栄ユル

（校刊美術史料）

本稿では、この南円堂創建の説話が中世を通してどのよう  
に理解されていたのかという点に着目し、さらに南円堂  
の「鎮壇」をめぐる生まれた説話について考察したい（以  
下、南円堂の創建に関して「補陀落の」もしくはそれに類  
する歌を引いている説話を総じて「南円堂創建説話」と称  
する）。

1

南円堂創建説話において、神が詠んだとされる「補陀落  
の」歌は重要な役割を果たしていた。ここでは南円堂と観  
音の浄土補陀落山とが重ね合わされ、また藤原北家の繁栄  
が約束されている。この歌は『新古今和歌集』神祇部にも  
収められており、またこの歌を本歌とする歌も代々の藤原  
氏によつて詠み継がれた<sup>1)</sup>。したがつて中世にはこの南  
円堂創建説話と合わせて、その和歌の解釈も行われていた。  
先に引用した『建久御巡礼記』は、続けて次のように記す。

補陀落山ハ八角之山也。彼ノ山ニハ藤ノ花盛ニ滋シ。

此御堂ハ彼山ノ有様ヲ移被ニ造也。北ノ藤波トハ、藤  
氏ノ四家ノ中ニ北家ノ筋、可榮之由ヲ読セ給、忝シ。

……

『源平盛衰記』巻第二十四も同様である。

南円堂ト申ハ、八角宝形ノ伽藍也。丈六不空羼索観音

ヲ安置セリ。此観音ト申ハ、長岡右大臣内麿ノ藤氏ノ  
変徴ヲ歎テ、弘法大師ニ誂テ造給ヘル霊像也。仏ヲバ  
造テ堂ヲバ立給ハデ寔給タリケルヲ、先考ノ志願ヲ遂  
ントテ、閑院大臣冬嗣公ノ弘仁四年御堂ノ壇ヲ築レシ  
ニ、春日大明神、老翁ト現ジテ匹夫ノ中ニ相交リ、土  
ヲ運ビ給ツ、一首ノ御詠アリ。

補陀落ノ南ノ岸ニ堂タテ、北ノ藤ナミ今ゾ栄ユル

ト。補陀落山ト申ハ、観音ノ浄土ニテ八角山也。彼山

ニハ藤並トキハニ有シトカ。件ノ山ヲ表シテ八角ニハ

作レリ。北の藤並ト申ハ、淡海公ノ御子ニ南家・北家

・式家・京家トテ四人ノ公家御座ケリ。何モ藤氏ナレ

共、二男ニテ北家房前ノ御末ノ繁昌シ給ベキノ歌也。

（中世の文学）

これらの「注釈」では、藤原氏と結び付けて補陀落山には  
藤の花が咲いているとしている。これは『不空羼索神変真  
言経』巻第八の、

其大海岸作七宝山。山上種種宝樹花果。其諸樹上有種

種色藤枝華葉。山間亦有池沼河澗。水中具有蓮花拘物

頭花芬陀利花優鉢羅花。 （大正新脩大藏経）

に拠るものである。高山寺蔵『不空羼索事』<sup>2)</sup>には「又

云補陀落仙之九峯ニ藤アリト云々。三十卷不空羼索経ニ見

タリ」とあり、『阿婆縛抄』第九十一「不空羼索」も南円

堂創建説話を挙げた後に「或人云、藤氏敬崇故見ニ羼索経

第十五、同経八云、種種宝樹花果。其諸樹上有種種色藤枝華葉。山間亦有池」としている（他に『白宝口抄』などにも同様の記述あり）。ここでの藤は蔓性の植物全般を指すのであろうが、これが補陀落山と藤原氏とを結び付ける典拠となっているのである<sup>⑧</sup>。

右に見たのは補陀落山に関する注釈であるが、南円堂の本尊不空羂索観音に関する注釈はないのだろうか。例えば「大正新脩大藏経」圖像部収録の諸書を見れば、しばしば不空羂索観音像を代表して南円堂の本尊が取り上げられ、その圖像の説明がなされていることがわかる。また、例えば『薄草子口決』に、

問、次第并経中冠中有「弥陀」云々。興福寺南円堂御作不空羂索冠中安「比丘像」。相違如何。……御口云、彼比丘像者法藏比丘也。法藏比丘即地藏也。……

（大正新脩大藏経）

とあり、『菅家本諸寺縁起集』には「口伝云、最上仏面者地藏菩薩也云々」（校刊美術史料）、『溪嵐拾葉集』巻第九十二には「師物語云、南円堂、不空羂索、宝冠、比丘ノ形仏、頂戴<sup>キ</sup>。世以不<sup>レ</sup>知之。一箇相伝<sup>ニ</sup>法藏比丘<sup>ト</sup>習也。……」（大正新脩大藏経）とあるように、宝冠の仏像をめぐっての秘説なども存在したようである。しかし、このような観音像に関する説は、いずれも圖像を巡る解釈であつて、南円堂の創建説話に直接関わってくるものではない。中世を

通して、南円堂の不空羂索観音は春日大社一宮の本地仏とする考え方があつたことからわかるように、重要な観音像であつたことは事実である。しかし、南円堂創建説話が簡略に引かれる場合には不空羂索観音の名前さえ触れられないことも多く、南円堂創建説話の焦点はその本尊ではなく、人夫に交じつて春日大明神が壇を築いたという、「築壇」の行為自体にあつたということができるだろう。そこで以下、南円堂の「築壇」に焦点を当て、南円堂創建説話の享受の様相をたどつてみたい。

## 2

- ・築壇人夫之中、老翁相交詠歌云、（『七大寺巡礼私記』）
- ・南円堂ノ壇ツクトキ老翁出来テ相交<sup>リ</sup>人夫ノ中ニテ壇ヲツクトテ詠<sup>ニ</sup>此歌<sup>ヲ</sup>。（『袖中抄』）
- ・此堂ノ被<sup>ニ</sup>築壇<sup>ニ</sup>之時、人夫之中ニ春日大明神交ラセ御坐シテ、聊有御詠吟。（『建久御巡礼記』）
- ・春日大明神、老翁ト現ジテ匹夫ノ中ニ相交リ、土ヲ運び給ツ、一首ノ御詠アリ。（『源平盛衰記』）

このように多くの南円堂創建説話が、人夫の中に老翁として春日大明神が交じつて歌を詠んだとしているのであり、このことは春日大明神が直接、「築壇」の作業に参加したことを示している。ここでの人夫達の作業は壇を築く

ための土を運ぶことにある。この「土を運ぶ」ことについて、近本謙介氏は「南円堂建立そのものを言祝ぎ、藤氏繁栄の礎として認識されることとなるこうした縁起説は、それ故のちの藤氏長者による重要な責務としての、興福寺修造の意味づけともなっていく。」として、『玉葉』建久五年（一一九四）閏八月二十四日条、南都焼亡後の再建事業を目的とした九条兼実らの南都下向から次の記事を挙げてゐる（傍線は近本氏による）。

此日修造南円堂之間、依有所思、運土築壇。寅刻、着束帯、先奉幣春日社、次参御寺。

このように兼実自ら「築壇」のための土を運んでおり、「一連の南都再興事業にあつて、藤氏繁昌の縁起を背景としたほかならぬ南円堂修造に際して、嘗て神と人とが築いた壇を、兼実自らがふたたび築きつつ祈念した」ことがわかるのである<sup>五〇</sup>。後に『溪風拾葉集』巻第一百五では、南円堂創建説話を挙げる中で、当時春日大明神が老翁の姿で歌を詠んだとする説が流布していたはずであるのに、

仍藤氏公卿繁昌。仍閑院御詠云、

補陀落乃南乃岸爾堂建天今昔榮留北乃藤地波美

冬嗣公手自ヲ南円堂壇ヲ築給ヤリ。甚深甚深。

として、冬嗣自らが土を運び歌を詠じたとしている。人夫に交じって土を運ぶ行為の中に、春日大明神と氏長者の姿が重ね合わされていたのである。南円堂創建説話における

「築壇」の行為が如何に理解されていたかは、次のような「補陀落の」歌の扱われ方からもうかがえる。

『大鏡裏書』

堂の壇つきけるがいたうくづれけるに、翁のいできて

この歌をうたひてつかばよもくづれじとて、うたひい  
だしたりける、

ふだらくのみなみのきしにだうたてゝいまやさか  
えんきたのふぢなみ

（日本古典文学大系）

『神明鏡』

寺中ノ西南壇築ケルニ、度々崩不思議ノ由申合ケル所

ニ、老翁出現シテ云、何築トモ可崩也。此歌ヲ唱ヘバ  
築ベシトテ詠。此歌ハ大明神ノ御詠歌也。秘ベシ云々。

補陀落ノ南ノ岸ニ堂立テ今ニ榮ン北ノ藤波

ト唱テ中ニ崩レズ。

（続群書類従）

このような、翁が土を運び、歌を詠じることによつて壇が固まる、といった理解には、この行為の呪術的かつ祝祭的な一面がよく表れている。壇を築くという行為が南円堂創建説話の中で重要な位置を占め、それが神聖な行為として認識されていたことがわかるのである。

さて、このようにして神と人とが土を運んだ南円堂の「築壇」を、儀式的に執り行った人物、それが空海であった。

空海は南円堂創建説話の中でどのように「築壇」と関わり合っているのか。次に、空海との関わりから南円堂創建説

話の変遷を見てみたいと思う。

3

現在のところ、南円堂創建説話が確認できる最も早い資料は寛治三年（一一〇八九）成立の『大師御行状集記』<sup>（一）</sup>である（以下『行状集記』と略する）。

#### 興福寺南円堂條第八十

日記云、興福寺、元者内大臣大職冠鎌子、依奉公勞賜藤原姓、叙内大臣、永以為摂録臣、依為其孫、左大臣不比等発誓願、所建立興福寺也。而漸年代押移、殆可移他氏、爰右大臣冬嗣、與大師師檀契深、可繁昌藤原氏之由被語申。此時大師、興福寺之内扱殊勝所、建立南円堂、奉安置不空羂索、氏人同住僧殊持念。因茲藤原氏彌繁昌、経代々為博陸丞相。件堂場築謠曰、

不多良岐美々奈美乃岐之仁須末彼志天喜多能不知  
奈美伊摩曾左賀由留（築壇人夫歌此歌云々）

ここでは春日大明神は登場せず、南円堂創建説話の古い形であろうと推察されることは既に拙稿で論じた。ここにおいてすでに「大師、興福寺之内扱殊勝所、建立南円堂」として、創建に関与する空海が登場しており、南円堂創建説話は当初から弘法大師伝記との関わりの中から生まれてきたと考えられる。ちなみに、『三僧記類聚』<sup>（二）</sup>第一には、

#### 興福寺南円堂大師鎮壇事

故御室御記云、治承五正三十丁丑、右宰相中将云、南都南円堂冬嗣大臣建立云々。其時大師御鎮壇之由承、及見大師御伝一（一）巻書。長元八年孟冬記云々、不載之。若他書中有所記説。

とあり、現存しない長元八年（一一〇三五）の「大師御伝」には未だ南円堂の記事がなかったようである。

一方で興福寺の縁起を見ると、昌泰三年（九〇〇）の『興福寺縁起』には、未だ空海の名は見られない。

右安置不空羂索觀音并四大天王像也。長岡右大臣殊発大願所奉造也。後閑院贈太政大臣以弘仁四年一造立円堂。所安置尊像也。……

（大日本仏教全書）

空海の名が現れるのは、次に挙げる承暦三年（一一〇七九）の『大和国奈良原興福寺伽藍記』が早い例で、この頃までには南円堂創建説話と空海が結びついていたかと考えられる。

南円堂 嵯峨天皇御時、長岡大臣内鷹奉造立。其故藤原氏衰歎、高野大師被申合造此像。然而不及作堂。其子閑院冬嗣、為遂先考之志。弘仁四（癸巳）年建立。被遂供養。堂鎮壇高野大師。

（大日本仏教全書）

ここでは「高野大師」の名前が挙げられているだけだが、

その背景には南円堂創建説話が發生しつゝあつたことが想像される。

これらのことから、南円堂創建説話の發生と共に空海が結び付けられており、逆に言えば、空海が南円堂創建と結び付いたところから、南円堂創建説話が生まれたとも考えることが出来るだろう。いずれにせよ、南円堂創建説話の生成期から空海は南円堂の創建に関与したとされていたのであり、空海が南円堂の創建に関わつたという伝説は十一世紀の後半に入つて広まり始めたと考えられる。また『行状集記』『興福寺伽藍記』ともに、冬嗣と空海が相談し、協力しあつたことが記されており、藤原北家と空海との交流を示す説話として南円堂創建説話は形成されたと思われる。

『行状集記』以降、南円堂創建説話は弘法大師伝記にとつて欠かせない記事となる。一例として、『弘法大師行状絵詞』巻第六第四段から挙げておく。

其の後、年序漸く移り、藤氏衰へ廢れて殆ど他氏に移らむとす。爰に、閑院左丞相冬嗣公、大師と師檀の契り浅からざるによりて、藤氏の繁榮を折らむ為に、弘仁四年、興福寺の中に勝処を扱ひ点じて八角の堂を建て、不空羂索の像を据へ奉りて、修行持念し給へり。

今の南円堂これなり。大師則ち鎮壇を行なひ給ひし時、壇を築きける人夫の中に、異相の老翁ありて、詠じて

云く、

補陀落の南の岸に堂建て、今ぞ榮えむ北の藤波

これ、春日大明神、形をやつし來給ひて、家門の繁榮すべき事を告げ示し給ひしなり。 (続日本の絵巻)

南円堂創建説話は、諸寺縁起集のような形式の資料にも引用されるが、それとは別に、このように弘法大師伝記の中でも伝えられ続けたのであり、むしろそれによつて人々の間には広まつていったのではないかと推測される。治承四年(一一八〇)の『高倉上皇庁下文(高野山文書統宝簡第四十六)』(『平安遺文』三九四六号)には、

……彼相論境、停能清非論、欲被返大師者也。其以者、尋東寺北家唱(昌)榮者、弘法大師南円堂鎮壇之徳也。

依之御堂関白詣南山、頻頭靈瑞、宇治博陸凝篤信、永施庄園、凡数代関白皆崇大師之聖跡、……

とあるように、平安末期には空海の南円堂の「鎮壇」が、東寺と藤原北家との繁榮と関わつて広く知られていたことがうかがえる。南円堂創建が大師の行跡の一つとして広く認識されることで、冬嗣・空海の協力による南円堂の創建、という構造が南円堂創建説話の基本的な形として認識されてゆくのである。

ii

弘法大師伝を中心に、南円堂の「築壇」を執り行つたと

広く認識されるに至った空海であるが、『行状集記』には「此時大師、興福寺之内摂殊勝所、建立南円堂」と記されるだけであった。しかし、建立時には何らかの修法を行ったと考えられたはずである。それが、『弘法大師行状絵詞』に「大師、則ち鎮壇を行ひ給ひし時」、「高倉上皇庁下文」に「弘法大師南円堂鎮壇」とあつたように、「鎮壇法」であつた。鎮壇法とは「堂塔伽藍等を建立する時、壇を築き、堂を建てたる後、土壇を鎮むる為に地天を本尊として修する法」（『密教大辞典』）である。これに対し、壇を築く前に修するのが地鎮法である。古くより地鎮や鎮壇の法を修する際に物を埋めるといふことが行われていた。南円堂創建説話周辺にも、鎮壇の際に物を埋めたとする説を引くものがある。それは金亀を埋めたとするものである。

#### 『興福寺流記』

弘法大師、偏為藤原氏繁昌、所造立也。壇下安置金亀一文。  
（大日本仏教全書）

#### 『春夜神記』

嵯峨天皇御宇弘仁年中、長岡大臣内廩、弘法大師有懃懃之御談合、丈六三目八臂、不空罽索觀音、像造立之、壇下安置金亀一文、并秘密鎮壇等、大師手自御沙汰、……  
（神道大系・春日）

#### 『元要記』110

嵯峨天皇弘仁年中、長岡大臣内廩、弘法大師有懃懃之

御談合、丈六三目八臂不空羅索觀音像造之。壇下安置金亀、其上三弁宝珠奉納。是則鹿嶋・平岡之兩神祝賜也。内院天井、九面神鏡在之。又棟空輪、仏舍利奉納。秘密鎮壇等、大師手自御沙汰。……

このうち『興福寺流記』は複数の資料からなるが、引用部分は『七大寺巡礼私記』と同じ頃に来たと考えられ、早くからこのような説があつたようである。既に鎮壇を行つたのは空海であると伝えられていたはずであるから、この金亀を埋めたのも当然空海と考えられていたであろう。また、二二四八年写の高山寺藏『興福寺南円堂不空羅索等事』<sup>(11)</sup>には、『七大寺巡礼私記』などとほぼ同文の南円堂創建説話を記した後に、

法印頼尊執行之時、増寺辺地之日、弘法大師地鎮之具所曳出也。

として、空海の「地鎮之具」が発見されたという記事載せる。本資料を紹介された田中稔氏によれば、頼尊執行の時とは寛治三年（一一八九）から康和二年（一一〇〇）の間であり、またこの資料の成立についても『七大寺巡礼私記』と同時期と推測されている。この記事がどれほど事実に基づくものなのかは不明であるが、少なくともこの記事が記された当時、空海が地鎮の際に物を埋めたとする説が知られていたために、発見された埋蔵物に対して「弘法大師地鎮之具」という判断が下されたいと考えられる。

このように、南円堂創建説話が成立した後の早い時期から、南円堂創建時に空海が地鎮具、或いは鎮壇具を埋めたという説話が發生し、伝えられていたことがうかがえる。単に空海の名が縁起に登場するのではなく、空海に縁起の中での何らかの具体的な行為を求めた結果、鎮壇法を修した際に鎮壇具（或いは地鎮具）を埋めたのであるという解釈、そしてさらにはそれを掘り出すことによつてその事実が証明されるといつた説話が生み出されたと考えられる。單なる行為のみならず、実際に「もの」によつてそれが証明されると言うことは、空海に対して、また南円堂創建説話自体に対しての信仰を高めるのに絶大な効果を發揮したと思われるのである<sup>110)</sup>。

そして空海の鎮壇具をめぐる解釈は、従来の南円堂創建説話と結びついたとき、ただの伝承としてではなく、創建説話の背景にあつた東寺や藤原北家といつた權威とも結びつくことになつた。例えば、『菅家本諸寺縁起集』の「南円堂」の条には次のような記事がある。

件堂及焼失度々、建治三年壇崩了。仍一寺評定云、申  
入長者、壇上之石等可改切替云々。于時長者照念院殿  
兼一被仰云、当壇者本願与弘法大師有内談、仏像経卷  
等、多被埋之、聊モ不可相乱、為長者為寺不可然云々。  
仍馳下東寺一長者、以日記如大師記被埋置之云々。

即ち、建治三年（一二七七）、南円堂の壇が崩れた時に壇

上の石を改めることを評議した際、照念院（摂政鷹司兼平）は「仏像経卷等」が埋め置かれていたから乱すことのないよう注意し、東寺一長者に従い埋め置いたという。ここでは空海の鎮壇具が神聖なものとして意識されていたことがうかがえるのであるが、さらにまた、その神聖性が氏長者と東寺長者によつて維持されていることが注目されよう。氏長者兼平自身が「当壇者本願与弘法大師有内談」と言っているように、創建以来の氏長者と東寺長者との関係が、鎮壇具発見の説話においても再び描き出されているのである。

### iii

さて、このように空海と南円堂の鎮壇具との関わりが具體性を帯びてイメージされるようになった後、鎮壇具を巡る説話が弘法大師伝にも登場する。『弘法大師行状要集』や『高野大師行状図画』がそれである。

#### 『弘法大師行状要集』第二

心覚阿闍梨記云、或明匠説云、興福寺南円堂、大師鎮壇也。白河院御塔ノ料ニ曳レ地之処、金銅之箱一堀出云々。仍被レ問ニ密家諸流ニ之処、其時一長者頼観已下不レ知之由令レ申了。義範録ニ子細申上。一ノ高名也。

於ニ子細ニ者、依ニ宗ノ秘事タルニ不レ能ニ具記ニ。可レ問ニ明師ニ云々。文（弘法大師伝全集・第三卷）



『高野大師行状図画（大藏寺本）』第五

白河院ノ御時、彼御堂の側に塔をたてらるべしとて地をひかれけるに、金銅の筥を掘出したる事あり。其時、宗の長者頼観大僧都以下諸流の然ルべき人々に勸問ありけるに、すべて存知の人なし。遍知院の僧都義範一人かの筥ノ子細相承の秘決を勸して奏聞せられたりけるに、聊かもたがはざりける。希代の高名なり。……

（弘法大師伝全集・第九卷）

これらはいずれも、先に引用した『弘法大師行状絵詞』とほぼ同様の南円堂創建説話に続けて記されているものである。『弘法大師行状要集』は東寺勸智院の賢宝による応安七年（一三三四）の著、『高野大師行状図画』は延徳二年（一四九〇）書写だが原本は元応元年（一三一九）成立とされる<sup>100</sup>。白河院が塔を建てるために地を引いた際、金銅の箱が掘り出された。それについて誰も分かる者はいなかったが義範僧都唯一人がその子細を知っており奏上したという。即ち義範のみが大師の鎮壇法について理解していたことを説く説話である（承暦二年（一〇七八）の五重塔再建時のことを指すか。ただしこの説話に該当する事実は確認できない）。この義範は、小野流の正統を継いでおり、醍醐寺に遍智院を建立したことから遍智院僧都とも称される人物である（次頁図参照）。この義範の説話を含む南円堂創建説話を載せる弘法大師伝は、江戸時代には版本とし

ても流布しており、この説話は弘法大師伝記に取り入れられることで広まることになったといえる。

ところでこの義範の説話は、早くは寛喜三年（一一三二）成立の『実婦鈔』に見ることができ、『実婦鈔』は、醍醐寺三寶院流成賢の口説をまとめたものである。ここでは、先ほどの弘法大師伝と同じ説話が、成賢の口説として引かれている。

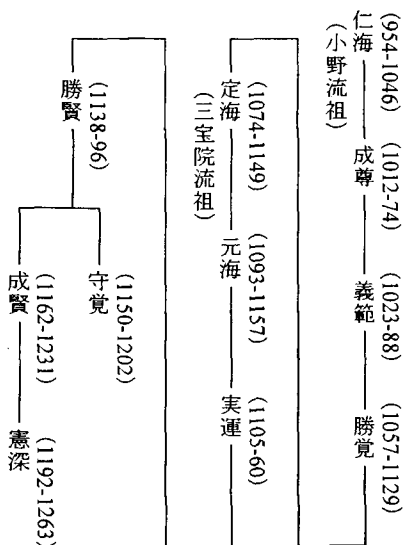
次口云、白河院御時、興福寺御塔地引之間、箱一合堀出之。奉行人怪上奏之。仍義範僧都有御尋之處、大師大鎮箱歟。納物然然ノ候ラント被申之間、開見歟之處無違事。仍大師御鎮末流下<sup>102</sup>違事貴也被仰云々。円宗寺大鎮成尊僧都也。写<sup>103</sup>彼南円堂歟。其後此鎮頗無之歟云々。……

（大正新脩大藏經）

次頁に挙げた小野流血脈に示したように、『実婦鈔』の語り手、成賢は小野流義範以降に分かれた三寶院流を継承しており、彼もまた遍智院を継いで遍智院僧正と呼ばれた人物である。この説話がいつ頃生まれたものかは明らかでないが、少なくともこれらのことから、空海から義範、そして自流への相伝を意識した三寶院流によつて伝えられていたことがうかがえる。

また、先の『弘法大師行状要集』では鎮壇具発見の説話が「心覚阿闍梨記云、或明匠説云」として引かれていた。他に『覚禪抄』巻第二百二十七「大結界」も『弘法大師行状

【小野流血脈】<sup>(1)(2)</sup>



る。

ところで、この鎮壇法は院政期に盛んに修せられていた。古記録より数例挙げる。

『中右記』天永三年（一一二二）九月二十一日

今夜安鎮御修法鎮壇之夜也。是七箇日中多当第五六日

之夜、先々有此地鎮云々。然而日曜之夜必行之者、今

夕依当日曜有此鎮也。 （増補史料大成）

『長秋記』大治五年（一一三〇）六月二十一日

鎮壇事、就真言家申状、重被問陰陽道之處、可依密宗

說之由、所言上也。 （増補史料大成）

『玉葉』嘉応二年（一一七〇）十一月五日

季長參上申云、光長申云、御堂事、庄々所課、大略領

状、其中少々有所洩之輩、重所責伏也。又鎮壇事可仰

誰人哉。東寺人可勤仕敷。又御導師公舜可勤敷。如何

者、…… （国書刊行会）

『長秋記』に「可依密宗說之由」、「玉葉」に「東寺人可勤仕敷」とあるように、特に真言宗で修せられていたものであり、十三世紀末の『秘抄問答』巻第四には「一、鎮壇

仁和醍醐兩流行レ之」（大正新脩大藏經）とあり、中世

を通して野沢兩流によつて行われていた。仁和寺御経蔵聖

教に収められる守覚法親王の著作にも、「鎮壇作法」「鎮

壇次第」などが確認されること。

では具体的にはどのような修法が行われたのだろうか。

要集』の「或明匠説云」から「一高名也」までと同文を引いている。『弘法大師行状要集』の「心覚阿闍梨記」が何を指すのかは未詳であるが、心覚（一一一七—一一八二）は三寶院流の実運やその弟子勝賢（右図参照）とも交流があり、特に勝賢との間では互いに諸法の伝授が行われていた<sup>(25)</sup>。ここでの「或明匠説」というのも、三寶院流の説である可能性は高い（『覚禅抄』の著者覚禅（一一四三—？）も勝賢等を師としている）。したがって、中世の小野流、特に三寶院流においてこの説話は伝えられ、後に弘法大師伝の南円堂創建説話に取り込まれたものと考えられるのである。

例えば、三宝院流実運の『秘藏金宝集』には、鎮壇の際に輪八枚・鍬八本を壇の八方に埋め、輪の中に鍬を入れるという修法が記されていること。

### 鎮壇

築壇建堂之後修之。輪八枚・鍬八本埋壇八方。輪中央穿穴入鍬峯令載立鍬埋之也。先自東方可埋之。各隨本方誦八方天真言可埋之。五穀粥二桶沃之（作法如前（地鎮）。粥地鎮・鎮壇共用之）。

（大正新脩大藏經）

その他、広沢流の作法を記す『沢鈔』にもこれとよく似た鎮壇法が記されているが、『覺禪抄』巻第九十二「地鎮壇」には「小野説……、広沢伝……」「小野口伝云……」等あるように、院政期から中世にかけて、それぞれの流派によつて口伝を伴つた鎮壇法が修されていたようである。

そして、この鎮壇法をめぐる、自身の修法が空海直伝のものであり正統であることを主張する動きが、小野流にあつたと考えられる。先に挙げた『高野大師行狀図画』のつづきには、

大師鎮壇の深秘、小野一流の所伝といふ事、世こそりて謳歌し人皆服膺しき。夫大結界の中徹は金剛乘の源底也。附法正統の外其奥旨をゆるさず。余流のし及ところ、一宗の世に越たる事あきらけし。

としている。次の『幸心鈔』は三宝院流成賢の弟子憲深の

説を記したものであるが、

鎮壇事（建長六（一二五四）四二十四。於報恩院承之）

問。付小野流自往古用來作法之外、又有之歟。答。然也。其故覺洞院（勝賢）常參北院御室（守覚）。頗被奉授秘伝等。則秘抄等也。仍其御感又御室僧正有授事。此鎮壇等也。小野鎮壇、以外事多具足モ其數入敷。付作法有煩。而此鎮壇事安体、又而甚深也。覺洞院殊被秘之故、一切不被授人。先師（遍智院）僧正（成賢）ノ詞二ハ、只我一人也。御室秘鎮ナリ。殊先師被秘云々。……此外鎮壇作法雖有其數、皆以枝葉也。

（大正新脩大藏經）

とある。ここでも憲深の師成賢が、鎮壇の作法を授けられたのは自分一人であると言っており、その鎮壇法こそが正統であると記されている。このような成賢の意識は、『実帰鈔』で自ら語っていた、南円堂鎮壇具発見の説話を伝える意識にも繋がっていると考えられる。この成賢以降、中世の三宝院流が鎮壇の修法に関してこだわりを持っていったことは、例えば『開心秘決』（三宝院流憲深・親快口説、親尊記）のうち、鎮壇法について記した第十「私鎮秘記」末尾の記述からもうかがえる。

正嘉元年（一二五七）十月晦日於醍醐寺報恩院奉伝受

僧正御房畢。即本次第之上添口伝親尊私記之此鎮作法殊可重之者也。相承次第（在別）。又祖師遍智院之僧正（成<sup>一</sup>）貞<sup>二</sup>二年六条殿長講堂鎮之時即被用此作法。当流尤可習用之。伝受於此作法之人不可用余鎮作法。

但伝之人纔九牛之一毛也。……

成賢の頃には鎮壇具発見の説話は、小野流の内部において、特に三宝院流が自流の正統性を主張するために説かれていたであろうが、それが広まりを見せることで、室町時代には弘法大師伝の南円堂創建説話にも付け加えられることになったのである。弘法大師伝の中の鎮壇具発見の説話は口説から離れ、義範の高僧伝とも言うべき、創建説話をめぐるエピソードの一つとなつてゐる。

ところで一方で、これとは少し異なる形の、鎮壇具発見の説話も伝えられていた。先に触れた『覚禪抄』の鎮壇具発見の説話の記事には裏書があり、そこには次のように記されている。

宇治大相国（＝藤原頼通）、興福寺南円堂修理之間、地ニ銀箱一ヲ引出。大驚○遍知院僧都（＝義範）被仰云、汝弘法大師末葉也。此堂彼大師鎮壇所也。今有此事、尤奇異也。吉凶能々可被量申。又於善惡可被祈請云々。僧都被申云、更別事不可有歟。彼篋中<sup>ニ</sup>彼事<sup>ヲ</sup>覚<sup>ス</sup>。僧都不見篋中悉披申了。後大相国有喜感歎云々。○○

（大正新脩大藏經）

同じ説話が『南円堂鎮壇』（真福寺藏。鎮壇法について記した書）の末尾にも、少し具体的に引かれている。

宇治大相国、興福寺南円堂修理之間、地ヲ引ニ銀篋ヲ一引出、大二驚テ召僧都（遍知院）被仰云、汝是弘法大師末葉也。然此堂者彼大師鎮壇所也。今有此事、尤奇異也。吉事歟凶事歟能々可被量申。又於善惡能可被祈請云々。爰僧都被申云、サル事候ラム。更別事不候歟。彼篋中修之事等候ラム。僧都不見彼篋晴ソラニ申事、篋中ニ同ジ。爰大相国泣々感歎随喜シ給フ。僧都奉此事賜彼篋、鎮壇シテ彼篋ニ銀ニ八卦ヲケニ打入中云々。故知是事慥大師流也云々。

同内容の説話ではあるが、ここでは今まで見た鎮壇具発見の説話には名前の挙がっていなかった頼通が登場し、義範の活躍とは別に、頼通と義範とのやり取りにも重点が置かれている。最後には義範が鎮壇具の中身を明らかにすることで、頼通は「泣々感歎随喜」しているのである。この型の説話は物語的興趣はあるものさほど流布はしなかったようであるが<sup>三〇</sup>、ここからは先に引いた『菅家本諸寺縁起集』に見られた氏長者と東寺長者の関係も思い起こされよう。かつての冬嗣と空海との協力による南円堂創建説話以来、中世には、それぞれの直系を嗣ぐ者（或いは嗣ぐと称する者）による鎮壇具の確認が繰り返し描かれているといえる。三宝院流で伝えられた鎮壇具発見の説話は義範の

功績を中心に説くものではあったが、その一方で同じ説話は氏長者と東寺長者との関わり合いを説く枠組みの中にも収まっていたと考えられるであろうか。

以上のように、中世における南円堂創建説話の享受の中で、特に空海の鎮壇を巡る説話に着目してみた<sup>三三〇</sup>。中世には、高野山縁起にも空海の鎮壇に関わる次のような説もあつた。

一、金堂大塔兩所鎮所事

鎮壇<sup>ハ</sup>有二所<sup>一</sup>。一者、尺迦菩薩本鎮。二者、大師始建立ノ時鎮壇、大塔新<sup>ニ</sup>始<sup>ル</sup>鎮壇ノ時、地堀、鍬打立間、本鍬<sup>ニ</sup>壺障<sup>ヲ</sup>打出。而間、大師駱<sup>シ</sup>。爰明神示云、此是、尺迦菩薩鎮壇之旧所、示<sup>ス</sup>輪壺<sup>ヲ</sup>。只出現、尔時、還又如本<sup>一</sup>埋隱<sup>シ</sup>了。其傍<sup>ニ</sup>、大師、新<sup>ニ</sup>重所<sup>令</sup>鎮壇<sup>一</sup>也。

……  
〔高野山秘記〕<sup>(三三三)</sup>

空海の大塔鎮壇の際、釈迦菩薩鎮壇の旧所であることを示す壺が出現したという。例えば石山寺創建の際に地を引いたところ、「五尺の宝鐸」が掘り出され「古仏の聖跡」であることが確認されたように〔石山寺縁起〕、地中から物が掘り出されることでその場の由緒が示されることは多い。南円堂についても、その「築壇」の説話の神聖性ゆえに、空海によって埋められた鎮壇具はいずれ発見される運命にあつたと言えるだろう。南円堂の鎮壇具が発見され、

義範によってその由来が明らかにされるといふ説話は、縁起の事実性を証明することとなり、それによってその説話を担う者としての三宝院流の權威を保証することにもなったのである<sup>三三四</sup>。またその一般的にも理解しやすい内容ゆえに、弘法大師伝の南円堂創建説話の一部としても取り入れられることとなつたのであろう。

ただしこの鎮壇具発見の説話は、近世に入つても弘法大師伝を越えてはさほど広まらなかつたと言わざるを得ない。近世には多数の「観音靈場記」の類が出版され、西国三十三箇所観音靈場の一つでもある南円堂も勿論そこに取り上げられるのであるが、そこにはこの鎮壇具に纏わる説話は見ることができない。言うまでもなくそれは、本説話が観音信仰とは無関係なものであるからだ。また本説話が限られた場でのみ担われてきた説話であることも示しているよう。

中世における南円堂創建説話は、藤原北家や東密といった権力と結びついて享受されてきたのであり、観音靈場としての南円堂の信仰が民間でも広まりを見せたのは近世に入つてからのことと思われる<sup>三五〇</sup>。本稿で見えてきたような南円堂の鎮壇をめぐる説話からは、中世の寺院における縁起享受の一つの様相をうかがうことが出来るだろう。

(注)

(一) 『七大寺巡礼私記』(奈良国立文化財研究所、一九八二)に拠る。

(二) 例えば「春日」と「北の藤波」を詠んだ次のような歌がある。

春日山北の藤波さきしよりさかゆべしとはかねてしりにき

〔詞華集〕雑上282・大納言師頼

春日山みやこの南しかぞおもふ北の藤波春にあへとは

〔新古今集〕賀746・撰政太政大臣

ちぎりあれや春日の山の松にしもかきそめける北の藤波

〔統古今集〕神祇722・後京極撰政前太政大臣

春の日ののどけき山の松が枝に千世もとかかる北の藤波

〔新後拾遺集〕春下153・太政大臣

(三) 田中稔「七大寺巡礼私記と十五大寺日記」(『奈良国立文化財研究所学報第二十一冊』研究論集1、一九七二)に拠る。

(四) 補陀落山の説明に藤が記されるのは經典では特殊であり、これらの資料がいずれも『不空羂索神変真言経』を典拠にしているように、藤の花に関する注釈は不空羂索観音に関する經典の説のみを拠り所としていたのだろう。

(五) 近本謙介「南都をめぐる能と日本紀」(『国文学解釈と鑑賞』64-3、一九九・三)。

(六) 『弘法大師伝全集』第一巻に拠る。続群書類従本も参

照した。

(七) 「仁和寺研究」1(古代学協会、一九九九)の影印に拠る。

(八) 藤原北家の台頭は空海没後であり、十一世紀に入つて大師信仰の高まりと共に、北家と空海との師壇関係を示す伝説が生まれたと考えられる。白井優子『空海伝説の形成と高野山』(同成社、一九八六)参照。

(九) 例えば、二〇〇二年に興福寺で行われた「興福寺中金堂埋納宝物 発掘調査速報展」では、中金堂創建の奈良時代初に須弥壇土中に鎮壇具として埋納された、和同開珎や真珠玉などが展示された。

(一〇) 伊藤聡「大倉精神文化研究所・神原文庫蔵『元要記』翻刻」(『大倉山論集』43、一九九九・三)に拠る。

(一一) 前掲注三、田中氏論文に拠る。

(一二) この他、『かな傍注本 新古今和歌集』(補陀落の)歌注には、

……淡海公建立、寺の四方ニ守ヲ立、此所ニ詔ニテ勸音千体ウヅム也。補陀落ハ世界ノ南ニ山アリ、此山ニ初テ勸音を専祭故それより何方にても勸音ハ山ニ祭也。補陀落山ノ心也。

『新古今和歌集古注集成 中世古注編3』

とあり、空海の名前はないが、南円堂の鎮壇具について様々な説が生まれていたことがわかる。

(一三) 弘法大師伝については梅津次郎『絵巻物叢考』(中央公論美術出版、一九六八)、阿部泰郎『中世高野山縁起の研究』(元興寺文化財研究所、一九八二)、『弘法大師空海全集』第八卷(筑摩書房、一九八五)「主要伝記資料解題」等を参照した。

(一四) 築島裕「醍醐寺藏本『伝法灌頂師資相承血脉』」(醍醐寺文化財研究所研究紀要)1、一九七八・十二に拠る。

(一五) 勝賢と心覚については、土谷恵「中世初頭の仁和寺御流と三宝院流―守覚法親王と勝賢、請雨経法をめぐって―」(『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』勉誠社、一九九八)参照。

(一六) 『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 資料篇 仁和寺藏御流聖教』(勉誠社、一九九八)に拠る。

(一七) これと同様の鎮壇具は、例えば建久五年(一一九四)建立の石山寺の多宝塔からも発見されている。『国宝石山寺本堂修理工事報告書』(滋賀県教育委員会事務局社会教育課、一九六一)参照。

(一八) 当然の事ながら、このような自流の正統性を説くのは鎮壇法に限ったことではない。例えば藤巻和宏氏は、三寶院流と宝珠をめぐる秘法との関わりから「山縁起類の成立について考察されている。」(『長谷寺縁起文』観音台座顕現譚成立の背景―空海神泉苑請雨譚・如意宝珠龍王伝授説との関わりから―)『国文学研究』133、二〇〇一・三、

「一山と如意宝珠法をめぐる東密系口伝の展開―三寶院流三尊合法を中心として―」(『むろまち』5、二〇〇一・三)。修法の相伝が縁起の解釈に結びついていくという展開を考える上で興味深い。成賢の頃の三寶院流については、土谷恵『醍醐寺の密教と社会』(吉川弘文館、二〇〇一)に詳しい。なお、林文字『報物集』に見る報恩院憲深―鎌倉中期における醍醐寺の一断面―(『醍醐寺の密教と社会』山喜房仏書林、一九九一)には、成賢・憲深の頃から醍醐三流(三寶院流・理性院流・金剛王院流)の間に対立があり、憲深の口伝を記す『報物集』には三寶院流の他流に対する優越性と正統性が主張されているという。

ところで、第1章で触れた『薄草子口決』は憲深の口決を記した書であり、そこで引用した南円堂空綱素観音の宝冠の佛像に関する説については『幸心鈔』にも記されている。鎮壇具発見の説話と合わせ、三寶院流の南円堂に寄せる関心をうかがうことができて興味深い。

(一九) 京都大学附属図書館蔵本に拠る。叡山文庫毘沙門堂蔵本も参照した。

(二〇) この後に「賢覚面記頗相違歟」とも記されているが、意味するところは不明である。

(二一) これと同型の、「宇治大相国」が登場する鎮壇具発見の説話が、『弘法大師年譜』巻六(『真言宗全書』)に「宗要詮云」として引かれている。この「宗要詮」については

未詳であるが、この型の説話も一部では流布していたものであることがえる。

(二二) 他に、南円堂創建説話に関わる空海の説話に次のようなものも見られる。

『神道相伝聞書』「春日秘記」(叡山文庫真如蔵)

問、土神事如何。……又南円堂建立の時、弘法大師向

葛城山ニ神ヲ召請シ給ニ、三石飛来テ彼ノ堂ノ南傍ニ落。崇

一之ヲ彼ノ堂ノ為鎮守トシ、彼石ヲ三ヶノ秘石トテ意垣トシテ彼一

言主ノ後ニ在之。三ヶ秘石ト者三菩薩宝珠則春日ノ御体

也。以之為其神ト也。

これは五行の神の内、土の神について述べた部分に引かれている。春日明神が土を運び、空海が鎮壇を行ったのと同様、土に纏わる南円堂創建説話と無関係ではないだろう。

(二三) 前掲注一三、阿部氏著書所収の翻刻による。

(二四) このような現象は、中世に流行した未来記の発見とも共通するであろう。

(二五) 例えば山岸文庫蔵『観音霊場記』(国文学研究資料館マイクロ資料に拠る)は、南円堂創建説話を記した後に、一人の娘が南円堂へ詣り続けたことで目の上の腫れが癒えたという靈験譚を記している。

本稿は、二〇〇二年仏教文学会本部十一月例会(於花園大学)における発表をもとにしている。また、寺社縁起研究会関西支部の方々にも御意見を賜った。御礼申し上げます。真福寺文庫、叡山文庫には貴重な資料の閲覧を御許可頂きました。御礼申し上げます。

(はしもと まさとし・研修員)